

短編・掌編小説集

(日本語/英語併載版)

# 「問わず語り」

シリーズ

“No asking from us.

But someone told something from own.”

series.

うときゅう いっき

by Khazu san

物書き

うときゅういっき



## 目次 (Agenda)

### ●短編・掌編小説 1

(Japanese expression ver.)

「みんなのお父さん？」 (前作「ゆりっぺ」改題、改変版)

(English expression ver.)

“Everyone`s father?”

### ●短編・掌編小説 2

(Japanese expression ver.)

「なぜか…」 (前作「我が青春のアンケ・ヴァレンチク」改題「再々」減筆修正版)

(English expression ver.)

“Why some…”

### ●短編・掌編小説 3

(Japanese expression ver.)

「最期の任務」

(English expression ver.)

The last mission.

### ●短編・掌編小説 4

(Japanese expression ver.)

「照れ隠し」 (掌編「風あげの子」改題、改変版)

(English expression ver.)

“A shy angel, wearing with angry mask.”

### ●短編・掌編小説 5

(Japanese expression ver.)

「老斗 (らおど)」

(English expression ver.)

“Unconscious one pushed for ahead.”

### ●短編・掌編小説 6

(Japanese expression ver.)

「真夜中の秘密会合」 (前作「真夜中の秘密会議」改題、改変版)

(English expression ver.)

“Midnight secret team meeting.”

●短編・掌編小説 7

(Japanese expression ver.)

「不協和音、不協化和音」 （前作「奇妙な朝」改題、改変版）

(English expression ver.)

“Unmatched noise, Unmatching noise.”

●著者略歴

2023/12/2

2<sup>nd</sup> Dec. 23

(Japanese expression ver.)

「みんなのお父さん？」

(English expression ver.)

“Everyone`s father?”

(Japanese expression ver.)

「みんなのお父さん？」

(English expression ver.)

“Everyone`s father?”

## 第 1 節



話を聞いたからと言って、特に自分で料理を作ろうと思ったわけではないのですが、出てくるものが、どういう手を加えるとそのような姿になるのかに幾分興味があったのと、離婚を経験した五十代半ばの男が一人で来て、そうそう偶然に、見知らぬ人がいい話し相手になることもそんなにはないので、自然といつも目の前にいるお店の板前さんとお話をするようになりました。

手さばきから、若いのにかなり研究熱心なのがわかったのですが、かといってそうした職人さんに有り勝ちな気難しさやお堅いところもなく話し方にも誠意が感じられるし、人当たりもいい。

趣味はというとロック。しかもギターを自作したりもする。そのせいか女のお客さんにも人

気のあるちょっと面白い人でした。

ある夏の夜、同じカウンター並びの一番左奥に、自分と同じか、それより少し歳上と思しき小柄な女の人が座り、なにやらこちらをじろじろ見ていました。

その日初めて見る人でした。

話し方や振る舞いが少し他のお客さんとは違うような感じがしました。ちょっとずれている感じがして「幾分浮いているかも」と思いましたが、どうやら僕と同じで、その人もこの若い板前さんがお気に入りの様子。盛んに話しかけています。と、同時にやはり時々、こちらをじろじろ。

ですが、その「関心」に反して、板前さんを頂点にした二等辺三角形の二辺は交信があったのですが、ぼくとその女の人を結ぶ底辺の交信はありませんでした。

その数日後、再び同じ配置になりました。

なにやら今度は、

「マイセンのカツサンドをたくさん買ってきたからみんなで食べて、お客さんにも」

と板前さんに差出し、若い板前さんも

「毎回恐れ入ります」

と答えているので、幾分退屈をしていたこともあって、敢えて

「たいそうお金持ちですねえ」

と声をかけると、

「あなたもおひとついかがかしら？おいしいのよ、これ」

と言いながら

「そちらにいてもいいかしら？」

と僕の返事を待たずに、にこにこしながら隣の席に移ってきました。そうして、

「あなたこの前、お見かけしたときに、お隣の方に、たばこ吸いますが大丈夫でしょうかとお訊きになっていましたでしょう？近頃珍しい御紳士な方でいらっしゃると思って…」元々が、子供の頃から余り好き嫌いをせずに、誰とでも仲良くする質（たち）なので、程なく、それから何度か日時を決めて、お店で会うようになりました。

そのたび毎に、日本橋高島屋のどこそこの売り場のお土産だと言って、板前さんにそれを差出していましたが、よく見ると、受け取るときに、ほんの少しためらいのようなものがあるのが感じられました。

しかし、当のご本人は何も感じていないようでした。

とにかく日本橋高島屋が大好きなようで、日本橋の高島屋以外はデパートとして認めていないみたいでした。

訊くとその人は、高校までアメリカで暮らしていたそうです。そのせいかどうか分かりませんが、全く唐突に、かなり場違いなタイミングで英語が飛び出すのです。

ところが、時々使う、本人だけは「ここぞ」とばかりにねらったつもりの、その場違いなタイミングの英語の発音が何故かとてもへたくそなのです。

まず、長文は話しません。発音も巻き舌ではなくて、なんだか舌の中に直角三角形定規でも入っているような感じです。水を米語の発音では「ウァラー」というべきところ、なにやら「藁（わら）」に聞こえたり、気にしなくていいよ、の「ドンマインヌ（又は小文字）」が「呑舞（どんまい）」のように完全に漢字読みに聞こえたりします。なんだかちょっと胡散臭い気がします。

確かにお金はありそうですが、何かちょっと変なのです。

甚だ傲慢かとは思いましたが、発音だけとれば、僕の方がまだましかもしれないと言う感想を抱いたりもしました。それにしてもそのような感想を抱かせてしまうレベルとは？

相当の年月、彼の地で暮らしたはずなのに、ここまで発音が直角、カタカナ読みなのは向こうで何かそうなる事情があったのかもしれない。例えば、暮らしていたのは外国だけれども、居場所としては自分の部屋ばかりだったとか…引きこもっていたとか。今見ると華やかに見えるけれど、ひとはわからないものだし。

## 第2節



そのうちその人は、初めはとても淑女然としていたのですが、暫くすると横にぴったり張り付いて、間においてあるお皿に乗った煮魚の身を箸でぐちゃぐちゃになるまでほぐしてから

「はい、お口、あーんして、たべさせてあげるからね」と言った後、

「おいちい？」

とまるで二十代の「彼女」のようになり、次は

「ホールのあの子、あなたを狙っているわよ。そんなこと、させないから。来たら噛みついてやる！」と夜叉にもなり、最後は淑女の「し」の字も、跡かたなく消え失せ、それがその

人一流の親しみの表現なのか、それとも本気でそう言っているのか、わからないのですが

「おだまり！シャラップ！頭（ず）が高い、静かにおし！」

とまで言うようになりました。

食べ方もあまりキレイではないし、こうまで乱暴な口の利かされ方をされると

「本当に言う通りの素性なの？」

と疑いの気持ちが生まれてきました。

ところがあるときには、そうした「猫っかぶりの淑女」が口にするとは思えないほど、殊勝な態度で、しかも全く前後の話とは脈絡なく唐突に

「わたし男の人とああなるの、キライなの。ああいうふしだらなの、イヤなの！分かる？ユーノウ？」

と酒の席ではあったにせよ、返答に困るような内容の質問を仕掛けてきたりもしました。そうしてその後「うにゃむにゃ」いいながらカウンターに突っ伏してしまうのです。

と、思いきや、またぞろそこから、やおら頭（こうべ）をもたげて、

「わたし、頭のいい人好き。それに、どこに住んでいるかなんて訊かないところも」

といいつつ、こちらから質問したわけでもないのに、自分は実業家の一人娘で、家にはお手伝いさんが居たこと。

家族と帰朝後、ミッション系女子大に進んだが、卒業後働いたことはないこと。

父親が「ゆりっぺ、ゆりっぺ」と猫かわいがりしてなかなか手放してくれなかったので、結婚は37歳までしなかったこと。

結婚した相手は鉄道技師で、週に何回かは泊まりで帰って来ないこと。

料理はしないで、ほとんど出来上がったものをお取り寄せするのだが、主人は文句を言わない。そういう約束で結婚したのだから、ということ。

お子さんは、自分みたいなのがもう一人居ては相手をするのにこまるので、作らなかったこと。

父上は既に他界していて、莫大な遺産を、そんなにあっても仕方ないけど、相続だけはしたこと。

ここで飲んだ後は、いつも六本木のバーに行って、みんなにドンペリをおごっていることなどを酔った口から、きいている方もいささかうんざりするでしょうが、こちらも、ここにきたのですら要約済みの抜粋版でしかないほど、このことに関しては細大漏らすまいとでもしているかのように、そのひとは、ひとりでどンドン喋ってきました。

そんな話を聞いていてふと思ったのですが、この人は、かなり幼い時から、母親がいなかったんだろうなと思いました。

滞米時の暮らし向きは知るよしもありますが、本邦においては、長いこと父一人、娘一人。いつもお取り寄せかお手伝いさんの料理ばかり。料理を作ったこともなければ、作ろうと思ったこともない。作ってくれともいわれなかったから。でも父娘、仲良く暮らしていた。それともう一つは、なんだかとても焼きもちやきで、こころの振幅もかなりあるひとだな

とも思いました。焼きもちについていえば、「嫉妬」や「ジェラシー」ではなくて、「焼きもち」。お目めメラメラではなくて、ほっぺを「ぷーっ」と膨らますような。

例えば、その人がいないときに、僕一人で行って、ほかの女のお客さん、それはもう 80 歳のおばあさんを囲んでの二、三人の女性だったのですが、僕がそのグループと仲良く話しているのを入りしなに目にして、僕と目が合った途端、「ぶい」とへそを曲げて、お店から出て行ったりもしました。

お店の子に噛みついてやると言ったことや、ぷいと出て行ってしまったことを思い合わせると、この子、といっっては失礼なのですが、なんとなくやはりこの子としか言いようがありませんので、この子は、まるで大好きな親戚のお兄ちゃんを盗られまいとする、兄妹の居ない女の子が「くるな！ここからあたしの陣地。私のお兄ちゃんよ。家来は私だけなの。わかった？さわんないで！あっち行け！」みたいな感じがしたのです。

他の人には女王様然と振る舞うのですが、何故か僕に対しては、まるで小四の女の子みたいに振る舞っていました。

しかも、勘が強くて、焼きもちやきの子なので、確かにいると問題は起こすし、そのくせまとわりついて、いささかうるさく思うこともなくはないのですが、居ないとなんとなく物足りなくもあり、妙な心境というか、気分でした。

### 第 3 節



そんなある秋の夜、かなりのレベルで酔っているのに、六本木のバーに行こうとするので、心配になって

「ゆりっぺ、もう帰った方がいいんじゃないかな」というと



「おだまりっ！誰に向かって口をきいているの？私に指図しないで！」と吠えた後  
「ご主人様じゃないんだから、ゆりっぺ、なんてなれなれしく呼ばないで！「百合子様」と、  
お呼びっ！」

と更にご機嫌斜めになり、それでもよたよたしながら行こうとするので、やむなく電車で一緒について行きました。

「わたしのこと心配？そう？だったら、嬉しいわ。許してあげる。かわいいっ！」と、今度は甘えん坊さんの態度です。

ところが、お店に入る直前になって

「子供じゃないんだから、平気よ、早く帰ってよ。あたし、みんなに優しい人なんて大っ嫌い！」

と、僕の何がご機嫌を損じたのか分からないまま追い返されてしまいました。

しかし、それでもやはり心配だったので、バーのあるビルの外に出て待っていました。

もう午前中の1時を回っています。

小一時間ほど待ちましたが、お店から出てくる様子がないので、ビルの階段を上がってお店の前まで行くと、その子が重そうなドアの前の床に突っ伏して眠っていました。

しかもお漏らしをして、その水たまりの中に

驚いたことに、大きい方も、一本ごろりとおわしまして。

おそらくスラックスパンツを脱いでいたのかも。

ちょっと困りました。

いや、かなり困りました。

いやいや、おおいに困りました。

見て見ぬふりをしようと思いました。

ひょっとして、本当は眠ってはいないで、薄目を開けているのだとしたらと思うと、出来るだけ静かに、気づかれないように後ずさりをして階段を忍び足で降りました。

ドンペリを毎回頼む上客に、お店はこんな扱いをするだろうか？ということを思い合わせると、何か見てはいけないものを見てしまった、恐怖とも罪悪感ともつかない気持ちに襲われました。

しかし、放っておく訳にもいきません。

仕方がないので、タクシーを呼んで、無理矢理抱え上げて、くずおれるように二人でバックシートに転がり込みました。

タクシーの後部座席で、その子は本当に眠っているのか？本当は起きているのか？よく分かりませんでした。

とにかく何も気づかなかった、見なかったことを印象づけないと、と思い、なにやら独り言のように、いろいろおとぼけの絵空事を言ったのですが、それが役に立ったのか立たなかったのか分からないまま、2万円を払ってタクシーから降り、運転手さんにお客さんを起こしてから、言うところまで届けてあげてくださいと頼んで、地元の駅のタクシー乗り場から小

一時間かけて歩いて自宅に戻りました。  
多分もう、連絡してこないだろうなと思いました。

## 第4節



ところが初冬のある夜、また、その子はお店にやってきました。そうして、ここは飽きたからほかのお店に行こうといいだし、別のお店に移りました。

そこは居酒屋さんなのですが、半個室のボックス席になっていて、席に着くなり

「わたし、ここのオーナー社長と懇意にしているの。ちゃんとサービスするのよ！」

とお店の人を一喝。あまりの唐突さと、場違いな権威の発揚を、こりゃちょっとまずいと思った僕は

「自分がもしそんなこと言われたら、どんな気持ちになる？却って逆効果じゃない？やめた方がいいと思うよ」と言うと、

「それもそうよねえ。アッタマいい！好きよ」

と言って、唇を押しつけてきました。

ぼくはお店の人が見ているからと、遠慮をしたのですが、その子はなかなか離れてくれませんでした。

ふと見ると、靴を脱いで上がった板張りのボックス、そのテーブル下のやや厚手のウール地の靴下に穴がいているのが目に入りました。

お金持ちの奥様の靴下に穴ポコ？

そういえば、お金持ちの奥様の割には、スカートをはいている姿も、和服の姿も見たことがないなと思いました。いつもスラックスかジーンズです。

その後、暫く飲んでから、僕らは外に出て、少しふらつく身体を支えてあげながら、駅まで連れだって歩いて行きました。

そうして別れ際、拒むように遠慮したり、靴下の穴ポコに気づいちゃったりして、ちょっと

可哀想だったかなと思い、酔っていたせいもあって、僕は駅、改札前の人通りの多い中で、殆ど鯖折りをするみたいに、その子を、ぎゅっと抱きしめました。その子の身体が後ろに、ぐっとのけぞりました。ぼくは力任せに鯖折りを続けながら「まいったか？まいったか？」と、「何がまいったか？」なのか自分でもよくわからないままこころの中でつぶやき、自分でもわからないそれが、逆にその子にはわかったのか？その子は、今までになく腕の中で、消え入るくらい静かにしゅん、となっていました。

## 第5節



その後、その子と暫く会うことはありませんでした。夏に知り合い、秋を深めて、大晦日が過ぎ、年明け暫くして、聞いていた携帯の電話番号に電話を入れました。以前もお誘いの電話をしても出ないことが何回かあったので「これじゃあ、電話番号を教えて貰った意味がないと思うけど」と言う。「ご主人様がいるんだから、そのくらい分かるでしょ？」と言われたことがありました。それで、以降、電話は控えていたのですが、なんかやたらに恋しくなって、「禁を破って」電話をしてしまいました。「今日くらいは、ちゃんと出てくれよな」と思ってかけたところ、数回のコール音の後、誰かが電話に出ました。「はい、百合子の夫ですが」慌てました。ご主人が、その子の電話を取り上げてしまった？見つかったの？僕は当時、離別した後のひとりもので、問題はなかったのですが、相手にとっては「不倫」と言われても仕方がない状況です。まずい！

そうとっさに思って「ちょっとした知り合いで、たいした用事ではないんです。はい！」と言おうとしたとき、

「生前百合子がお世話になられた方ですか？ありがとうございます。百合子は今年のクリスマスイブの前日、23日の深夜に亡くなりました。お風呂の浴槽で溺れ死んだんです。さみしかったんだと思います。本当に可哀想なことをしました。私も留守がちで。それで毎晩飲み歩いて、とうとうその日も、泥酔して帰ってきた後、お風呂に入って、蛇口を開きっぱなしにして眠り込んで溺れてしまったようです。朝仕事から帰ってきて、返事がないので、家中あちこち探し回って、お風呂場で見つけました。何が起きたのか分かりませんでした。茫然自失でした。

警察が不審死として、調べにも来ました。慌ただしい年の瀬とお正月でしたが、やっと少し落ち着きました。どちら様か存じませんが、出来れば百合子の冥福をいのってやってくださいまし」

いつの間にか電話は切れていました。

おそらく長い事、自分が無言のままでいたからかもしれません。

家族の中の誰かが死んだような気分でした。

## 第6節



一体あれはなんだったのか？おつきあいをしたのか？不倫をしたのか？それとも親戚の中三のお兄ちゃんが、一人っ子で兄妹の居ない小四の女の子の遊び相手になってあげただけだったのか？

そういえば、お兄ちゃんという言葉で、ふと思い出しましたが、一度だけ僕が声を荒げたことがありました。この親戚の小四みtainな女の子のあまりのわがまま、ご無体を年上の男子としてさすがにこらえきれなくなり

「僕はキミの家来ではないっ！」

と乱暴に立ち上がり、その子を置き去りにして、お店から出て行ってしまったのです。  
その後、その時のことを話す機会があって、この子が言ったのには  
「あの後、わたし、追っかけたのよ。探し回ったの。駅までも。駅の反対の改札までも。追  
いかけたなんてはじめて。今まで誰からも怒られたことなかったから」  
とっていました。

処がその後一転、これまた唐突な話の展開にしか思えない切り出し方で  
「街頭の「あしなが募金」に一度に3万円を寄付したら、周りから変な目で見られた、大き  
なお世話よ！可哀想な子たちにはお金がいるのよ！」  
と言ってもいましたっけ。

今思うと、なんとも気まぐれでとらえどころのない子でした。本人は別に人を煙に巻くつも  
りも、煙に巻いてそれを楽しんだりするつもりもさらさらなくて、ただただ自分に正直にし  
ているつもりらしいんですが、ぼくや僕を含めた周りからすると、言っていることや遣って  
いる事が、何故そう言い出すのか？何故そんな事をするのか？その答えを見つけるのがそ  
う容易くなくて、「よく分からない」事だらけになったりもしていました。

しかし今思い当たったんですが、本当を言うと、見ていられなかったのだと思います。危な  
っかしくて。この子、この先どうなっちゃうんだろうって。通り過ぎようとして、通り過ぎ  
られなくなっちゃったんだと思います。放って置けなくなってしまうていたのかな、と思っ  
ます。

## 最終節



それから数年が経ちました。  
その間に僕は他の人とお付き合いをし、程なくお別れしました。その別れ際に、お付き合い  
をしたひとが  
「みんなのお父さんになりたいだけなのね」  
と言い残して去りました。  
「みんなのお父さん？」

路傍の石を？みんなのお父さんが？拾ってあげた？助けようとした？天にまします我らの父として？お兄ちゃんではなくてお父さんとして？

そういえば、今思い返してみるとぼくは、ゆりっぺの後にお付き合いをした人も含めてお父さんの居ない子や、おとうさんの影響が強すぎるための問題を抱える子によく好かれていたことに思い当たりました。

初めての恋人もそうでした。その子は父親の代役として僕のことを好きになったのです。そうして、そのことに気づいて去って行っていった…

もしかして、僕は、問題を抱えている子を敢えて選んできた？何故？糧にしようとしていた？何の糧に？

対等ではない。庇護する立場。遠目に見る立場。救う人間。手を差し伸べる人間。多分上から。余裕を持って。余裕綽々で。手のひらの上で。遊んでいいよって。天にまします我らの父。僕だけが知っている貴女の本当の顔。僕だけが知っている仮面を脱いだその素顔と仮面をかぶらずに済む方法。仮面をかぶらずに済むのは此の私の前でだけ。選ばれし救い主のいい気分。情け深き父。博愛の極み。

何の糧に？みんなのお父さんになるために？つまり、天にまします我らが神さまになるために？

「これって宗教じゃないか？」

だからある距離以上には入ってこない。あるいは、入ってこられない。こちらも出て行かない。出て行かないと言うより「下に」降りない。

それじゃあ男と女になりきれない。いや、なるわけがない。恋愛ではなくて親子か師弟。それで去られる。いや、それじゃあ逃げる。

恋人になろうとしていなかった。夫婦になろうともしていなかった。だのに恋人になり、夫婦にもなってしまった。父が娘を家畜かペットにするみたいな妙なもの。そうして自分のことは柵に上げての、非常に巧妙且つ迂遠で遠回しな、モラル強化に見せかけた、その実、実態はモラル・ハラスメント？いや、巧妙且つ迂遠という顕在意識レベルでのそれより更に悪い、潜在意識レベルでの「意識操作」？いや、いや「無」意識操作？これは余りにも…

天にまします我らの父は当然女の人とはお付き合いもしませんし、結婚もしません。いつも独りです。それは神さまの絶対条件みたいなものなのかもしれません。

その絶対条件を守るために、天にまします我らの父でいるために、殆ど無意識レベルでの、実に巧妙にカムフラージュされた手口を使って、常に独りでいるために、その孤影、いや、弧を描いて、その内側に人を入れず、自分もまたその弧の外に出て行かない、弧の中に独りの「孤独」を守るために、僕はこころ密かに相手の方から去るように仕向けていたのではないかな？

にわかにわき上がったその疑問を前に、僕は酷くたじろぎました。そしてそれはやがて、確信に変わりました。自分は、みんなのお父さんどころか、何か見るのもおぞましいもの。怜悯な月明かりの下で、隠された本性を浮かび上がらせる冷たくひえ切った「蠟性(ろうせい)

の魔物」のような気がして、自分自身に青ざめていくのを感じるのです。

「あなたの頭の中は、何か他のことでいっぱいなのよ。他の女（ひと）じゃなくて、ほかの何か。あなたは、ほかの何かをいつも見ていて、ここにいるけど、ここにはいない。同じものを見ていても、全く違ったものが目に映っている。私はいつも一人のような気がする。この先、ずっとどこまで行っても、あなたの中に、私が入る余地はないような気がする…いつもわたしは、置いてきぼり」

長年忘れていたその言葉を思い出した瞬間

「あたしだけ見ていてほしいのに。猫っ可愛がりしてほしかったのに。主人もあなたも、私は二の次の置いてきぼり。お父さんみたいにしてくれなかった。なんで、お父さん、死んじゃったの？私一人をおいて。もう、いやっ！わたし、これからお父さんのところへ行く！」  
「ひょっとして…ゆりっぺは…」

(English expression ver.)

## “Everyone`s father?”

### Section 1



“Even though no cooking by own self even if hearing his lecture of cooking way but having interest of how to cook usual coming out dishes or no finding talking friends as it happened out because of divorced 50ies guy, from natural flow, I had begun to talk with cook “Itamae san” who always standing as a cook in front of me beyond counter table.

While watching his hands using way, despite cook`s age was young, however, very skillful from own R & D, and despite so skillful, so hi meister that usually the type of such cook may be nervous, however, he was very frank and friendly, his talking way had good faith.

His hobby, that is listening to rock music, add on hand made crafting own guitar. Under these, he was very popular from women customers, like the left, he was very interesting guy. In one of summer night, a woman was sharply glancing at this direction of mine, while having a wooden seat at the end of counter table which both were on the same line sitting at. She was perfectly newcomer at least for me, I counted.

And I also counted her speaking way and behaving way were little bit different from others. She looked like little bit out of correct position standing, more over can say, beyond the moon standing, like that.

It looked like she was fun of this young cook as same as me, she had been so many times speaking to him. There was triangle, from her to cook, from me to cook were connected online but no connected on bottom line, her to me.

But I had noticed sometimes she was glancing at this side secretly.

Several days later, there was the same positioning there.

What some in this time,

“Please have a break all staffs with this named “Maisen” pork cutlet sandwiches because so many bringing here by own spending money. And providing to other customers around.”

She was handing them over to young cook. Bater, young cook was replying,

“Every time, so thankful you would, so much!!”

On opposite even though I had been boring, then saying to her

“So rich madam you are!!”

“Would you have one, also you? It`s very delicious!!”

And after that

“Can I get beside your side?”

Without waiting for my reply, she had come closer beside me. And

“Former at the time while seeing you, your behavior would be nowadays so rare gentleman like because before your smoking, to neighbor asking could I or not...”

Originally from childhood, without selecting, even though I had been starting conversation with anyone, soon later several times we had become to meet there with fixing the schedule.

At each time she had handed it over to the young cook with explaining about Takashimaya brand department store inside some shop or inside other shop. But sharply observing the scene, the cook looked like a holding something hesitation.

On opposite her side, looked like a holding no noticing.

Anyway, she was deep lover of Takashimaya brand and she was no counting other department stores except Takashimaya, looked like.

From hearing of it, she had been staying in US until her graduating from abroad high school.

Because of it or not, don`t know, but perfectly sudden, perfectly out of normal timing



coming out English speaking.

But sometimes using her English quite wasn't fluently, why some.

Firstly, no speaking with long sentences. Pronunciation of her wasn't using by rolling tongue but by sounding like a mouth inside staying something solid.

For example, pronunciation of the word "water" is, in American English "wə:rə" but hers one is "WARA" this pronunciation in Japanese means in English "straw", "don't mind" is "DONMAI" the same in English "a guy drunk's dancing". On summarized, her pronunciations are all Japanese sounds like. Little bit faky smallish like.

Looks like rich but little bit strange, I felt.

Even though my judgement might be less courtesy, but my pronunciation might be better than hers one. By the way, what such feeling caused on me her English is what from?

So many years she had spent abroad, however, her English has been so Japanese pronunciation style, such she had held something reason on abroad might be, maybe.

For example, living place is abroad, but staying space is only own room inside, no time going outside any case, might be or not. Current now looks like gorgeous alive but no one knows inside mind...

## Section 2



At the first period, behaving like a lady, but soon later, settling beside me tightly, between us on the counter table the dish of boiled fish by soup, the fish she jammed by chopsticks and one of pieces she brought near my mouth, then said,

"Hey, my kid, open your mouth widely, my dear, open, ok?"

And asked me,

“Tasty, nice? My kid, hand-some boy!?” (not handsome, but hand-some)

Turning to be like a 20ies young girl,

And sometimes turning to be like a woman devil like below,

“That hall staff girl is targeting you, looks like. While coming closer to steal you, I`ll bite her sharply,

And truly or not I can`t count, at the last period, she screamed to me,

“Shut up!! Too hi position, your head for me Qween!! Take lower than current!! Always bow in front of me!!”

Eating manner not so graceful, saying way like this so dirty that caused me “Is she really, rich madam, lady or not? Caused doubt on me.

But as it happened on the other scene, suddenly she began to murmur below, no linking with before, after,

“I don`t like that way with a male. That pervert matter, dislike, understand, you know!?”

Even though at the time of bar drinking, she sometimes asked me or murmured herself own speech, don`t know, whichever, the asking I couldn`t answer so easily at once and after it, got down on the counter table, while murmuring something own matter.

But and after it more again waking up suddenly again,

“I love smart guy and no asking my address guy!!”

After this own way insisting, starting own long history even though never my asking,

According to her secret leaking story, whatever, several matters are below,

“I`m a daughter of big businessman.

Inside home always hired housekeeper had stayed, life.

After reaching Japan with her family members, joining in woman only mission university, but after graduating from it, no time to work any case.

Although her father loved her so deeply and treated her by comfortable pet way, no hoped to hand her over to other guys hands inside, from it, her marriage age was 37 years old.

The guy of becoming husband was engineer on railway maintenance field, a few days per a week, no coming back home, staying in working place.

No time cooking, instead of it, having almost readymade meals but husband no complaining because already made a promise with husband.

They no to have child. Because she thinks about that it`s very troublesome of like her copy one more besides. It`s her side request.

Her father is already no staying in this world. Even though no need so many his assets, but anyway, she accepted.

After drinking up here, always going out for another drinking at Roppongi located bar, and

always “Dom Perignon (French very hi class hi expensive soda type champagne)” which as it`s on her, provide to unknown arounds.

Like above stories, rush, rush further from own self speaking.

While listening to such, as it happened inspiring, from so young aged, she had been no mother, the life, I guessed.

Sure I can`t imagine staying US life, but in Japan life, according to my collecting information concerning to this family, father one, daughter one, the life so long.

Meals are always delivered one or hired housekeeper cooking one. No time to cook, no time to hold a will for cooking. Because no one requires. But father and daughter, friendly life, having.

Addon on another way, aspects, she was so jealousy holder. But it`s not a type of like eyes inside fire burning up but like, a type of cheeks inside air ballooning up, looked like.

For example, while she is absent, me alone going out for Izakaya bar, as it happened, I had been talking with 80 years old woman surrounded by other old women, while coming in, glancing at this, she turned her steps and go outside with cheeks ballooned, rush and rush. Such a case I had.

Or her saying that I will bite hall staff girl!! or this, with cheeks ballooned up going outside, both mixing, on summarized, this girl, I know this calling her way is out of courtesy, but on way to calling her other except this calling, then, concerning to this girl, I imagined that looked like alone child less own brothers, less own sisters she, who is trying to protect relative bros. from others` stealing, then screaming inside mind, that it`s mine, from here my area, never come closer, never touch, get away!!, like these.

To others she behaved like a Qween, but why some in front of me, she behaved like a 4<sup>th</sup> grade elementary girl.

Addon, even though she was over insisting fighter type and jealousy holder, sometimes for me she had been troublemaker, sometimes for me had been bothering me girl, but less her, why some it made me not enough, lonely, caused me wondering mind, why some.

## Section 3



In such an autumn night, even though she was so hi level drunk up at first drinking place, but she was trying to go out for Roppongi as second drinking place, bar, I got worried about her,

“Lily, you`d better to return home or not?” I said,

She roared like a woman tiger,

“Shut up!! To whom you say? Never command to me!!”

Addon

“You aren`t my owner, never call me “Lily” so easily!! Bater, call me “Qween the Lily Elizabeth”!!”

Such above she got irritated, even though no option, I followed with her by on train.

“You are so worried about me? If it`s so, I`ll allow you. Cute!!”

Next in this time, turning to like a candy girl`s behavior.

But at the time just before entering bar,

“I`m not kid. No need attendant, no need support. I very huge dislike a cherishing everyone like a guy!!”

In this time addon, which part of me made her irritated, the reason while no noticing, I was pushed outside from her beside.

But despite of worrying about her, however, I held a standby mode outside.

Already over midnight am 1 on my wristwatch.

After around 1 hour outside holding standby, but even though looked like her coming out, so

I was stepping up to the floor, standing in front of bar nearby, I found her out, who was laying in front of bar whose door was looking like so heavy weight.

With getting scared, she was lying in the pool put from own pissing out. Addon getting scared, nearby her, large one like a fat snake laying also.

Maybe put long pants off, then had done it unconsciously, might be.

So, got in panic, me.

No, so, so, got in panic.

No, no, very huge got in panic, on my side.

I inspirated, trying to pretend no noticing.

After from my imagining that perhaps, she is not sleeping, bated, with quarter open eyes watching at my behavior to her, if it's so correct understanding for this accident, I stepped back as silent as possible for her no noticing, stepped down with silent mode keeping.

"For VIP customer who every time order "Dom Perignon very hi class champagne" , bar staffs can treat her such?"

From mixing with above and my other observations, it invited me or fear or sin something like these from seeing what never see, never notice, ones.

But never take a choice of making her left.

Then even though no option, calling a taxi, forcing lift her body up, both of us rushing into back seat of called taxi like a snow collapse.

At the back seat of taxi, she truly gets slept down or awake, I never could judge which of both is true.

Anyway, it's the first advantage to put it on her mind, the left one it means what on my side no noticing, no seeing anymore, anything, anytime, then wearing comedian performance on me.

But above comedian performance was useful or not, while never can judging, after spending fee 20k ¥ to taxi driver, getting out from taxi and ordering to taxi driver after making her awake, asking her where to get out and I got left away from taxi pool in front of usual using sta. and returned to home on foot by taking almost around 1 hour.

Maybe from her side own, will no try to contact anymore, I guessed.

## Section 4



A night in the beginning of winter, she visited at the Izakaya out of my marking. And we moved to other Izakaya because she said “I`ve been tired of here” and she required to move to other somewhere.

The other Izakaya, they had half open style box seat tables.

Sitting at box seat table at once, with loud voice she insisted “I`m your owner`s friend.

Cherish us politely!!”

Too much sudden and place misunderstanding, this behavior like a tyrant, even though it`ll make something trouble, I counted, then I advised to her from lower than her position.

“If you are insisted like above from first meeting guy, how do you feel? You`d be better to stop like this behavior, I think.”

“Oh, oh, yes, yes. I agree. You are so smart. Love you!!”

And she pushed her mouth on my mouth, and despite while saying “Arounds are watching at us” I was hesitating, however, nonstop her series actions were.

As it happens glancing at her feet under the table on the wooden floor, be put, one of the socks had a hole, be torn, no repaired one, I noticed.

“Rich madam wearing socks have a hole, really?”

By the way, despite she is a rich madam, nevertheless, I have no time to see she has been dressed up, like a, wearing brand costume or kimono wearing, vasa versa always she has been wearing casual ones only, sometime jeans, sometime casual pants, like those.

Later some long drinking, going outside, us walking on until to sta. concourse, sometimes my supporting her swinging from drunk up.

At the time of saying goodbye, from my sorry mind which my hesitation like a by shutting or my noticing at her socks hole, I held her so tightly, nevertheless around passersby watching on sta. concourse.

Her body got curved towards behind back side by my strong arms fastening. And while holding her tightly, making her curved behind, I said inside my mind “you, give up? Give up, you?” to her, however, I couldn`t understand the meaning of this murmuring. Vasa versa from understanding of her own side, she had lost against power, no comparison with former her, in my tightly fastening arms.

## Section 5



After it later, I had no time to see her.

At the time of summer, first meet, autumn and end of the year passed, and over beyond beginning of the year soon later I phoned to her mobile phone number which she opened to me former the past.

In former the past also, while for invitation of to meet offering phone ringing, but even though she no picked mobile phone up, I complained to her,

“From it, no meaning of your phone number open, isn` t it?”

Against for it, she also returned complaining to me,

“No option!! Because I` m married woman, beside me, staying my husband, you know?”

Then a, then from it, I saved phoning her, but so felt missing her, breaking the rule between us, I phoned.

“Minimum in this time, pick this phone up, hope to.” Inside my voice.

After several times calling, someone picked it up.

“This is Lily` s husband speaking.”

I got in panic!!

Tentative, her husband had taken it away from her hands inside? Or this secret route got opened? Had caught up?

At the time as I got divorced just before, single, then no problem on my side, but she was married woman, then this situation is no option her to be called out of ethics on her side.

“Bad!!”

Just the moment, at once inspirated, then took a pretending,

“I` m not her boyfriend but a mere male friend, today concerning to tiny matter phoning.”

While try to tell such, from the phone side voice,

“Are you a helpful one for my lost wife while she had been alive? Thank you so much, was.

Lily died on 23<sup>rd</sup> last month midnight, just one day before Christmas Eve night, died from too much hot water drinking up inside bathtub lost consciousness.

She might be lonely because of so many times my absent from home by jobs, I guess. So sorry mind for her I `m holding now. Maybe from loneliness, she had been ever night series drinking here and there, and at the night under drunk up mode, after reaching home, opened the bathtub forest, lost consciousness, inside bathtub sleeping, then from it, too much hot water drinking up, got died, looked like, I guess.

Next morning after reaching home from working place, no one replying inside home, I explored for searching her inside home here and there. And at the last got found her out in the bathroom. What happened, I couldn` t understand anything. All lost mind up.

As a citizen`s suspicious death matter, policemen came to check our home.

Despite under so rush panic busy end of the year and beginning of the year period, but now I got little bit calm down. I don`t know which is your side, if you can, please pray for her calmness in the Heaven, would you?”

Within no noticing period, the line cut off. Maybe because of so long time my silence, might be.

Feeling like my family member someone lost, felt like.

## Section 6



What was that? What at the time happened was that? To be a girlfriend with? Or to be out of ethics affair? Or merely to be a playmate with, for example, relative bros of 3<sup>rd</sup> grade in secondary school playing with no relative alone 4<sup>th</sup> grade in elementary school girl, with her or not?

From my memory, as it happens, I got remembered from the word of “bros.”, that once I got angry with loud voice scolding her because never could keep calm from this 4<sup>th</sup> grade elementary school girl`s “me first” behavior, then scolded her as an elder guy, me,



"I`m not your under, not your servant!!"

After screaming it, I roughly standing up, going there out with rushing, getting her left, run away out!!

Later concerning to this affair, we had an opportunity, while talking about it, she mentioned it that, "at the time I tracked you, until to sta. until to on opposite side of sta. tracking someone, it was the first time for me because I have had no time to be scolded from anyone."

But after it, the situation got all changed, like a, no linking with anything, an episode suddenly was told from her mouth below,

"On the promenade nearby sta. for named "Ashinaga (in English meaning is Mr. long legs holder uncle on novel.)" fund for less parent children while donating 30k ¥ once, arounds watched me with suspicious eyes.

No need such, need money for less parent child!!"

Also mentioned so above, just I got remembered.

Analyzing it from point of now, she was like a weather in autumn in Japan, very easily changeable volatility holder and never can catch up, the girl.

On her own side no hold to plan arounds jammed, no plan to enjoy jamming. Vasa versa she tries to be honest to own, looks like, but from arounds included me from all ones` eyes, she was looked like difficult girl for understanding her behavior, for example, why you say so? Why you react so? Like these.

But just now I got inspirated, indeed, in my actual, I couldn`t keep watching her because it looked like she walking always on tight rope, if she alone walking forward further, to where she would reach? While passing through nearby her, I never could be passing through, never could be pretending no noticing, I should attend her besides, might be, I guess, might be my own swung mind. It`s very delicate matter to say as a true repot to others.

## Last Section



From that, several years passed.

During the period above, I Had communicated with several females on love affairs and had said several goodbyes. At the time of saying goodbye, one of them said, while putting below, left away.

“To be everyone`s father, merely, what you want, or not?”

“Everyone`s father?”

On the sideroad tiny stone block? Gave picking up way? Gave trial for helping? As a Heaven`s father? Not as a bro. but as a father?

On analyzed, making own remembered, After Lily, girlfriend? Lover? Woman? Female? What? Which? including her, all were less father or father complex daughter, the facts, I noticed, which they liked me, got sympathized with me, familiar with me.

At my first girlfriend was so, like above. She loved me as her alternative, as his agent, loved me. But after noticing it, she left away from herself own.

Perhaps, rather, I had selected problem holder girl, rather? Why? For feeding own self? For what feeding?

Not flat, not fair, not faithful. The position for covering. The position of putting distance for monitoring a deal. Rescue gentleman guy. Volunteer gentleman guy. Maybe from upside. With to keep escaping space, with to keep so much allowance. On my palm, you may play around freely, as you like. On the Heaven`s father. Your true face which only me, I know. Putting mask off your naked, bare face which only me, I know and the way of avoiding from wearing mask which only me, I know. What you can keep no wearing mask is only in front of me. Comfortable feeling of can rescue father. Deeply heartfelt father. Just flat fairness.

For what? For becoming everyone`s father? For becoming on Heaven`s father?

“Is this a religious style or not?”

From it, while their keeping some distance, they no come entering or they can`t enter. From my side, also no go outside own. By more correctly saying, no stepping down toward “downside”.

From such, never can fall into a position between man and woman. No, never happen such.

It`s not a relation of between man and woman but of between parent and child or “Maister” and staff student. So that they leave away. No!! Run away.

I never had tried to turn to lover situation. I never had tried to fix married couple situation. Nevertheless, got turned lover situation and got kept (or held) married couple situation. Like a treating them as a pet like this, strange one.

And after putting my own inconvenient truth on upward lack shell board, by very hi technical and far around like a on foot excursion way, by moral harassment ( not moral hazard) which I make it pretending to moral up, by not above surface consciousness controlling, worst more, by under consciousness controlling, is it too much smallish or not...

Exactly, on the Heaven father never take love matter between man and woman and never get married. Always be alone. It might be like a, the absolute condition of on the Heaven`s father. For keeping the absolute condition, for staying on the heaven`s father position, by using very "well" camouflaged hi technic, so for keeping be alone that to draw circle line around me, to stop them entering in my setting circle inside. And on my side to no go outside from own also. It`s above, for keeping be alone own, me forced them from their side saying goodbye situation fallen into or not?

In front of this question which suddenly coming out, I got swayed. And soon it got turned to confirmation, to be fixed. "I`m odd zombie one rather than on the Heaven father."

Under cool sharp moon light, floating odd natural up, like some monster made from candle material which is uncomfortable touching sense waking up, seemed to be own. My face got pale at the time, soon got it turned.

"Inside your mind full occupied by something others. Not by other women but by something others occupied. You stay here but not stay here because you always look at something others. Despite we look at same one, but on your eyes get screened something others. I feel always alone. Forward into future, forever alone, I`m feeling. Inside you, no stay me. Always I`ve been left, lost."

At moment of gotten remembered above phrases which so long time had forgotten ones.

"Wish only at me watching but, wish treating me like pet cat but, but, but, but you two, husband and you always put me on second position, no give me first advantage position. Always me get left, alone. You never treat me like my Daddy father. Why you Daddy, father had gone away, left me alone? I never can accept it anymore!! I wish go to your place!!"

"Perhaps...Lily was..."

2023/12/12

12<sup>th</sup> Dec. 23

(Japanese expression ver.)

「なぜか…」(前作「我が青春のアンケ・ヴァレンチク」改題「再々」減筆修正版)

(English expression ver.)

“Why some…”

(Japanese expression ver.)

「なぜか…」

(前作「我が青春のアンケ・ヴァレンチク」

改題「再々」減筆修正版)

(English expression ver.)

“Why some…”



(Japanese expression ver.)

「なぜか…」

(前作「我が青春のアンケ・ヴァレンチク」改題「再々」減筆修正版)

若い頃、露文科の学生だったので、ロシアに語学留学で3週間だけ滞在した折、我々短期留学生の男子の間で、評判の女の子がいました。名前も分からず、どこの国から来たのかも分かりませんでした。小柄、金髪、青い瞳のとてもかわいらしい娘(こ)です。

「あんな娘(こ)と話してみたいな。何語で話せばいいんだろう」などと言う話をしていましたが、その娘のそばにはいつも、古城の門番みたいなでっかい女の友達がついていて、虫払いをしているようでなかなかきっかけが見つかりませんでした。

ところが、ある日、与えられた自室のベッドの上でごろりとなっていると、扉をノックする音がしたので、「いいよ、入れよ」と横になったまま、言いました。同じ短期留学のクラスメートだと思ったのです。

しかし一向に入ってくる様子がないので、仕方なく起き上がって扉を開けると。

立っていたんです、その娘さんが。ただし、その後ろにおばあさんも立っていました。

無論、とっさの事なのでまるで言葉が出てきません。第一何語を使えばいいのかも分かりません。当時ロシアではあまり英語が話されていなかったのです。自分も高校まで既に6年間、英語を習っていましたが、殆ど英会話はできませんでした。

ですが、その娘さんが話し出したのは、英語でした。

「わたしは、アンケ。アンケ・ヴァレンチクです。西ドイツから来ました。後ろに居るのは私のおばあちゃんです」

と、そこまではおぼろげながらもなんとか理解できたのですが、その先はよく分かりませんでした。

一体この、かわいらしい青目金髪の娘さんが、天孫降臨みたいに僕なんかの部屋に、何の用があつて来たのか？

何かやり取りはあった筈なのです。

日本語を教わりに来ましたではないでしょう。無論お付き合いをしてくださいと言うようなダイレクトな切り出しでは絶対なかった。ならば…？

暫くして、アンケとおばあさんは扉を閉めて、帰っていきました。

今、手元に、そのアンケとドラキュラでも住んでいそうな古城の門番みたいな、大柄な女友達と、当時の僕のクラスメートの男子が映っている写真が残っています。

多分これは、通っていた外国人向けロシア語学校の入り口の階段そばだと思うのですが、門番女子と友達の男子学生はどこか、遠くを見ている目つきなのですが、アンケだけは僕が向けたカメラのレンズをじっと見つめている写真です。

今見ると、アンケは、少し微笑んでは居るのですが、何か少し切ない目をしているようにも見えます。

ですが、やはり、どうしてこういう写真を撮れるシチュエーションが成り立ったのか？

一体あのとき、あの短い時間で…この写真は、その後？その前？

当時に比べて今では、外国人コックが働くカレー屋の主人として、前より少しは英語が分かる様になりました。

それに、自分は「音」覚えだけはいい方なので、それを頼りに当時の細部を整理しながら思い出してみました。

すると、当時は意味の分からなかった言葉も、音（おん）だけはちゃんと耳に残っていたので、その時、彼女が言った言葉のニュアンス（使用英語による感情表現差異の理解）にたどり着く事が出来ました。

“Tomorrow, “not we will” but “we are going to” return to our hometown in West Germany. So enjoyable time giving to us, so much thank you. Have a nice trip. Danke SchÖn”

「明日、西ドイツに帰ります。楽しい時間をありがとうございました。良い旅を。ダンケシェーン」

そういう謂い方で何らかのメッセージを託しに来たのでした。

「不都合な真実」

“Not we will” but “we are going to” return to.

（帰ります。じゃなくて帰る事になっています）

「帰ります」の will 表現は本人が意思や意図をもって、自ら選んで帰るという含意。

「帰る事になっています」の be going to 表現は、何か違ったことが起る前の、あらかじめ組まれたもの、予定ではそうになっています、というニュアンスを持たせた表現で、あの時、使われた英語表現の差異は当時全く分からなかったものの、真意がそうであったことは、あの時既にその雰囲気から感じ取っていた。

「是は予定で、予定は未定ですから、それを変える事も出来るんですよ」

であるにも拘らず、その隠されたメッセージを敢えて自分は肩透かしした。

気付いていながら気づかない振りをした。

何故？

「本国に恋人を残してきたから、その彼女への義理立て？

違う。

言葉も通じない、文化も違う異国の女（ひと）への警戒心？

其れも違う。

それとも一人有頂天の思い込みが外れる失態を演じたくなかったから？

恥をかきたくなかったから？

確かにそんな防衛本能が脳の片隅を霞通ったのは事実なのですが、それだけだったとも言い切れません。

其れより前に、もっと違う何かが脳の片隅をよぎっていた。

防衛本能の話は「自分の一人舞い上がり」として面白おかしく話すネタに転用しようとしたとも言えるし、みんなに分り易い様に一般化しただけの様な気もする。

じゃ、一般化する前に何が自分のアタマの片隅をよぎったのか？」

自分でもよく分かりません。

唯、しいて言えばなぜか、「あまり、ハッピーになりたくない」「人を差し置いて、自分だけ恵まれた立場になりたくない」

でしょうか。

そんな妙な事、思う人も居ないでしょうから、違うのかもしれませんが。

*(English expression ver.)*

“Why some…”

“In my youth era, even though I was a student on subject of Russian literature in university, while visiting in Russia for joining in Russian language lecture class on period 3 weeks around, At the same time there was a so cute girl that inside our group of male students we had been always murmuring about her, like a, talking about movie heroin star.

We didn't know her name, didn't know from where, from which country, didn't know, but condensed and cute, blue eyes, blond hair wearing was.

“Wish to talk with such a cute. In which language speaking?”

Like above talking, however, around, beside her, always stayed big size woman like a titan gate keeper, maybe her the same country from, friend always attached, because of it, we never could so easily had found good trigger of chance out.

But a someday, while laying relax on a bed in offered my room inside, I heard of door knock sound, then I invited to it with staying lay on a bed “Ok, come in, no problem” because even though it is one of my language class the mate, maybe, I counted.

But so long time no sign of coming in that, from less option, waking body up and opened the door from my side.

Standing was, there. The cute. But not alone, behind her, old woman also was there.

Although it was sudden happening, so getting lost words was on my side. First, which language using, I couldn't find it out. At the time in Russia, English speakers were so few. And on my side until the end grade of high school in Japan, already had learned English language up enough 6 years, however, almost no English speaker the same at the time, my level was.

But at the time her speaking language was English.

“I'm Anke. Anke Valentic. From West Germany. Behind, my grandma.”

Until here, faintly I could catch her English speaking up, the later, couldn't, from at the time my actual English level.

Then a, why, for what such a cute, blue eyes, blond hair wearing girl knocking at my room's

door, coming, visiting, why so, for what? Like an angel's knocking at the door, from heaven coming?

Something conversation was there, maybe.

It's not for visiting Japanese language lectured from Japanese me. Not for "Let's start having a date of direct message telling come was sure also. Such a no courtesy never, she was never such.

Soon later, Anke and her grandma returned after closing door.

Now, in my hand a photo on which Anke and her friend like a gate keeper of old castle in which likely to live, Ballon Dracula and our language class male student, my friend were 3 there.

Maybe this scene on photo, from my taking one, was in front of Russian language class at the entrance steps.

On it, her friend Miss woman gate keeper and my male friend were looking at far direction somewhere, but Anke only pinpoint looking at my camera lens.

At now from checking this photo, Anke looked like little bit faint smile wearing around her mouth, add on it looked like on her eyes floating something faint one.

Anyway, from which such a situation scene could be? This photo, before or later, of at the time?

Now from comparison with at the time, my understanding level for English language got little bit up because just now I'm owner of curry restaurant where all cooks are foreigners, no option way except speaking English.

Add on, even though I'm good holder of be listened to spoken sounds, while following with this my ability, have tried to remember at the time detail, with organizing each item.

From it, even though at the time her speaking sounds has remained inside my ears, her speaking which I never couldn't understand the same at the time, but now I could reach to the nuance of her speaking phrases.

Below the one I remembered,

"Tomorrow, "not we will" but "we are going to" return to our hometown in West Germany. So enjoyable time giving to us, so much thank you. Have a nice trip. Danke SchÖn"

By above speaking way, nuance, she put something message on it.

Truth which not well for me.

"Not we will" but "we are going to" return to.

At the time despite I couldn't understand perfect anything what she said by mouth, however, what she wants to say in English speaking, what she put, at the time I had understood from her around less speaking.

"This is preset schedule. Preset's pre is not fixed. I can change it.



Despite of it, I passed her hidden message trough, gave a faint.

Despite of noticing, pretended to no noticing.

Why?

Because I left lover in Japan, so that for no betraying?

No.

Because she is my unknown language speaker and my unknown culture holder, so that take a hesitating?

Also No.

Or because I no hope to take an ashamed position from my one side misunderstanding?

Certainly, holding it, but not only such one but something other staying inside me.

Just one step before it, something other one was running inside my brain, a moment, be trough.

What`s that?

I can`t catch it by myself own.

But if I can take dynamic explanation,

“Why some, not so eager to get happy. Vasa versa, wish to run away from happiness.”

“Before others, only me, to get happy, no hope.”

Like above, might be.

Even though such strange concept holder nowhere, so that it might be not hit one, might be.

2023/12/14

14<sup>th</sup> Dec. 23

原作

2021 年 3 月

Original

Mar. 21

*(Japanese expression ver.)*

# 「最期の任務」

*(English expression ver.)*

**The last mission.**



*(Japanese expression ver.)*

「最期の任務」

これはとても感傷的なお話です。

しかし、百年に一度の疫病禍の時節には、そうなるのも仕方がない気も致します。

以前、お店に向かう途中、1メートル進むのに1分以上もかかる老犬を連れた、体格がよく顔には品格を感じるご老人とよくすれ違い、挨拶をするようになりました。

「旦那さん、いつも大変ですね」

「いやいや、自分よりこいつの方が」

そんな会話です。

しかし、ここ2か月ほど、その姿を見かけなくなりました。

こちらもいろいろありましたので「そういえば、なんとなく見ないな」くらいで済ませていました。ほとんど忘れていたと言ってもいいでしょう。

それが、今日突然、

「わんこは連れていないが、あのご老人かな？」

という人とすれ違ったので、他の人同様ウィルスを防ぐためのマスクをしていたせいもあって「間違いかもしれないな」とは思いつつ、声を掛けました。

「いつも、わんこを連れていらっしゃる方ではありませんか？」

するとそのご老人は、足を止めてマスクを外しながら

「はい。そうです」

とおっしゃったので

「わんちゃんは、今日はいないんですか？」

と尋ねると

「亡くなりました。1月に」

とにこやかながら寂しそうな顔でおっしゃいました。

「そうですか。かわいそうに。旦那さんは元気でいてくださいね。お力をお落としでしようけど」

ご老人は薄い笑いを浮かべました。

「ありがとう」

しかしそのマスクを外した顔は、下半分が白い無精ひげで覆われていて、その力の落としようがはっきり表れていました。いつもはきちんと髭を剃っておられたからです。

自分は、実はすれ違うたびに、あのわんことの散歩がこのご老人の生きが이었다ような気がしていました。というより最後の任務。The last his mission。

「わしがいなくなれば、誰がこいつを散歩させるんだ」

その任務は終わってしまいました。

わんこより元気なご老人にとって、あの1メートルを歩くのに1分もかかるわんこは、反対にご老人の「心のステッキ」だったのかもしれないな、と思いました。

会話をした後、次第にお互いの距離が遠ざかるにしたがって、何故か、悲しくて、悲しくて仕方なくなりました。

それぞれの行き先が反対方向だったので、お互いの、その後の顔を見ずに済んだのは、幾分なりとも、幸이었다ような気がいたします。

*(English expression ver.)*

The last mission.

This is a very sentimental story.

But it might be no option to get such because we have been so hard under a virus pandemic disease influenced once per 100 years.

Former, on the way to own restaurant located at top of flat hill on foot, I had seen old gentle man on whose face holding noble one, whose body fine scale, while he was following with very aged dog who had taken almost 1 minute over per 1 meter to get forward, we had gotten turned greeting to each other under unknown time.

“Hello, Mr. gentleman, Sir always hard work carrying have been!!”

“No, no. It`s not for me, but for this guy is hard, more.”

Like above, toss pass conversation catch ball.

But previous period of 2 months around, no seen.

On our side, we had been under so many trouble matters had happened, so that despite concerning to it, however, almost had forgotten, very sorry matter.

But it suddenly got turned today,

“Less dog with, walking, however, is the one that gentleman or not?”

While going beside trough the one looked like that gentleman, I asked him even though doubting it`s mistaking or not because he was wearing facial mask half under his face for protecting against virus as same as others wearing.

“Are you Sir always walking with aged dog or not?”

“Yes, I am”

“Today less dog with?”

“Lost. In January past.”

Wearing smile, but with lonely he said above.

Then I said,

“Sorry for it. But keep fine, Sir, I can understand your sad mind.”

The old man, on his face, with pale smile floating, replied,

“Thank you. Little bit younger me, sir.”

But the face putting facial mask off, although it` covered by no treated white aged colored full beard, it obviously showed his disappointed mind. Because he always would have treated beard by saving neatly.

Indeed, in anytime meeting through beside them, this aged gentleman and dog, I had counted it, for this old sir, that walking with lost dog whose taking 1 minute more to get forward 1 meter, rather, his life keeping power source. As his “the last mission”.

“I got lost, who let this guy, dog walking!!”

But the mission has gotten over.

For this vital fine old man more than his aged partner dog, rather more, that looked like more scrapped dog might be his stick for his mind on his last life walking, I guessed it.

After the talking, getting distance far and more, why some, I got putting sadness on and on my heart.

Even though each one`s forward direction was opposite, to couldn`t see to each other, it might be minimum better, I`m feeling it.

2023/12/15-2

15<sup>th</sup> -2 Dec. 23

(Japanese expression ver.)

「照れ隠し」(掌編「凧あげの子」再、改変版)

(English expression ver.)

“A shy angel, wearing with angry mask.”

原作 2016 年「凧あげの子」

Original in 16 “A girl, kite up.”

(Japanese expression ver.)

## 「照れ隠し」

(掌編「凧あげの子」再、改変版)

(English expression ver.)

“A shy angel, wearing with angry mask.”



(Japanese expression ver.)

「照れ隠し」(掌編「凧あげの子」再、改変版)

18 年前、12 年間続いた心の病が底を打って以来、その後 3 年間、感情鈍麻の後遺症が残っていて、頭の回転も今ひとつの状態でした。

そんなぼんやりした感覚に覆われていたので、底は打ったものの、どちらに向かって歩いて行けばいいのか分かりませんでした。

何かを見つけないかと思いか、以前から趣味だったカメラを持って、あちこち歩き回っていたのですが、15 年前のその年のお正月に、最寄り駅から一本で行ける片瀬江ノ島海岸の東浜に海の風景を撮りに行きました。

行くと、思いもよらず、浜いっぱい親子連れのグループが広がっていました。

お正月の凧揚げ大会を遣っていたのです。

しばらくすると、お昼時になり、そこそこで、家族がお弁当をひろげて食べ始めました。

見ていると、その中に、独りコンビニ袋から取り出した出来合いのお弁当を食べている小学校四、五年生くらいの女の子がいました。家族で来ているほかの子達は、みんなお母さんお手製のお弁当をおいしそうに食べている中で、なんとなくその子のことが遠目にも気になり、しばらく見るともなく見ていました。

すると、そこへ、同じ歳くらいの女の子がやってきて、その子を浜辺に引っ張り出すと、まずその子が、自分で凧をあげ、凧が風に乗ると、その凧糸を先ほどの独りボッチでコンビニ弁当を食べていた女の子に渡しました。

そして、渡した子が元を押さえて、渡された子が舵を取りました。

凧はお正月の浜辺で、真っ青な空の中、面白いように泳ぎ、次第にぐんぐん上がっていききました。

それを見たコンビニ弁当の女の子の顔。

たこが上昇するにつれ、どんどん明るく晴れやかになっていったのです。

何もかも忘れて、何かずっと先を見ているような明るい笑顔。

嬉しくなりました。何か胸が詰まりました。そうして

「みんながこういう顔になるような仕事をこれからしていけたらいいかもしれない」

なんとなくそれまでとは何かが切り替わったような感じがしました。丁度「角を曲がった」とでも言うのでしょうか。

気がつくと、既に景色が切り替わっていて、それまでのことが「過去に属している」ように思えたのです。

今の時点から話すとそういう表現になりますが、その時はまだはっきりとした自覚はありませんでした。

ただ、周りの海や空や親子連れの姿が、まるで自分を覆っていた膜でもとれたかのように感情鈍麻が吹き飛び、突然、自分の中にスーッと、本来の姿で流れ込んできて、何か直接こころの肌に触れたような感触を得た事だけは覚えております。

★★★

残念ながらその時の写真には、タコ糸を手渡した女の子は手しか写っておりません。

カメラのファインダー越しに被写体として見たので、なぜか、鹿つめらしい、とても不機嫌そうな顔をした陰の立役者の子を入れてしまうと絵にならなくなると思ったからです。それで、タコ糸を手渡されて晴れやかになった子の方をメインにして陰の立役者の子の方は手だけになってしまいました。

多分、陰の立役者の子は、幼心にも「カッコよすぎる自分」が、とても恥ずかしかったのかもしれない。

「恐らく、照れ隠しなのだろうな」

それ迄の様に「この子、何怒っているのだろうか？」という不可解なものとしてではなく見る見る内に笑顔になった子を見て、何となく以降の自分の身の振り方のヒントを得たような気分のその時の自分は既に、この写真の元々の構図が、実際に手足や具体的な形を持ったものとして、それ迄とは異なった印象を伴って自分の中に映り込んでいたのだと思います。

*(English expression ver.)*

**“A shy angel, wearing with angry mask.”**

“18 years ago, until that time, although 12 years had been continued mental disease got left away, however, later 3 years period, even though still were staying condition of lost emotional sense, my brain was not running fine well, still little bit foggy.

From under such, I was covered by foggy sense, despite turning around up from bottom condition, nevertheless, towards which way stepping forward, I couldn't count it.

It might be from wish to find something hint for it, the reason or not, I had been wondering there and over there with carrying still function camera because from former taking a photo, my hobby had been.

As it happened, 15 years ago, at the beginning of that year, I visited Enoshima winter beach for taking photo of seaside beach sights because nonstop one line railway running from my nearby station.

After reaching seaside beach, finding more family groups spreading full spaces around out, full occupied beach got covered over. Perfect out over of my marking, pre-counting was.

Because kite up big performance of begging the year on the beach got opened.

Later soon got lunchtime, here and there families opened lunchboxes and meals eating started.

While watching around unconsciously, inside their pools, a girl who looked like around elementary school 4<sup>th</sup> or 5<sup>th</sup> grade, alone was there, I noticed. And found only her picked readymade style convenience store lunchbox out.



All other children with their family members visiting had had their mothers` handmade ones and had eaten looked like being deliciously.

While concerning to her condition, monitoring her little bit longer later.

At the time scene got turned, to nearby her place, looked like the same age girl coming closer, then pulling her, going for not occupied seaside free space and firstly, the pulling alone girl up another girl, from own self, operating kite up, which while running well in the clear sky, after it, handing the kite string over to alone girl.

And handing string over side girl fixing the end of string, handed it over side alone girl operating kite own.

The kite in the blue sky of beginning the year, well running freely, later soon, up, up and higher up.

The face of alone girl, watching at the kite behavior!!

While the kite higher and higher, the face of alone girl was getting clear and clear.

Looked like all forgotten in front of her, instead of it, watching at far beyond, the one, bright her face.

I got felt happy, my heart full occupied. And,

“It might be well taking the job which let them, their wearing turns to such a face from now as my works.”

I felt as if something turned, got changed. Like a corner point turn to some other direction, might be feeling.

At the time of noticing, scene had already changed, every happening until that time, all belongs to the past, I felt.

At now can explain logically, but at the time never could explain logically because my brain was still not clear yet.

But simply, I had memorized that around me, the shape of sea, sky, family groups, as if non clear my emotional sense got left off, suddenly got flowed me inside, carrying with genuine their shapes and directly touching the surface skin of my heart, I felt.



Because of my very sorry mind with, the photo at the time taken, the girl of handing kite string over shows only the hand because at the time as a photographer me, even though concerned to only from good camera angle photo result, then I put her off from inside camera angle because this handing it over hidden heroin girl was why some wearing ugly face looks like getting angry. From it, only handed kite string over wearing bright face girl on the photo.

Maybe despite of kid, she got ashamed own too much stylish behavior, might be.

After watching at handed it over girl`s face getting fine and fine, feeling like a hint getting for later behavior taking, this opposite handing over it over girl reflected on me not as an unknown object but being different impression from former, as a concrete vital with carrying hand, head, heart, 3H carrier, might be so on.

2023/12/16

16<sup>th</sup> Dec. 23

(Japanese expression ver.)

「老斗（らおど）」

(English expression ver.)

“Unconscious one pushed for ahead.”

原作

2022/8/7 掌編小説（定本）「老斗（らおど）」

Original

7<sup>th</sup> Aug. 22 “Rao-doh.”

(Japanese expression ver.)

「老斗（らおど）」

(English expression ver.)

“Unconscious one pushed for ahead.”



(Japanese expression ver.)

「老斗（らおど）」

キリッとして如何にも気の強そうな顔をしているのに、意外にも子供好き。  
お店にやってくる子供を見ると相好が崩れる。  
何度来てもやはり相好を崩す。

見てくれ構わぬ働き者。地べたにはいつくばって念入りに雑巾掛けをする。

故国からやってきた後輩の面倒もよく見る姉御肌。

反面少し焼きもち焼き。

それはすぐ表情に出る。

子供みたいなところもある。

思ったよりお茶目でユーモラスだ。

けれど頭はなかなかいい。

学がある訳ではなさそうだが、気働きと回転が速い。

今どき我が国には居ないタイプ。

それで外見はというと、実際そんな恰好をしている訳ではないが、イメージとして

「黒いチャイナドレスに身を包んだ謎の美人人妻スパイ」

初めお互いの国の言葉を聞きあい教え合う処から始まって、

助けたり助けられたり、

庇ったり庇われたり、

手に入りにくいものを手に入れてやったり、家族にしか出さないという賄い料理を食べさせてもらったり。

行くと自分の紹興酒のボトルには一目見てわかる様に必ずゴム輪が巻かれておりラベルの上には「老人」と書かれている。

初めは何も言わなかったが、だんだんこちらの気持ちが動くにしたがって気になりだした。そしてある日

「確かに俺はじいさんだが、何もわざわざ「老人」と書く事はないだろう。なんで「老人」と書くんだ？」

と聞いてみたが、なにやらにやにや笑うばかりで答える素振りがまるでない。

顔には「ヒッ、ミッ、ツ」と書いてあるように見える。

例のお茶目顔の上にそう書いてある。

処があるとき、本人がしばらく席を外していたので、幾分暇を持て余し、そのボトルを何気なく見ていると「老人」と書かれているとばかり思っていた文字が「老人」ではなく「老斗」と書かれていることに気づいた。

「老人じゃないのか。でも老斗ってなんの事だ？」

それで手元のスマホアプリで調べてみると「らおど=いつも斗(たたかって)いる」と出た。

戻ってきた俊麗にそのことを言うと

「アナタ、イツモ、タタカッテイル」

と恥ずかしそうに照れ笑いをした。

其れが得も言われず可愛らしかった。

「カワイイってなんていうんだ？」

「くーあい」

「じゃ、ニー、クーアイ、クーアイ。フェイチャン (=very)、クーアイ」  
結局彼女とは結ばれることはありませんでした。7年前の事です。  
しかし俊麗が呉れた「老斗」という言葉だけは心の中核に残っております。  
お怖れながら、今思えばあの時初めて耳目した「老斗（らおど）」というたった一音一語が  
ひとの「性分（しょうぶん）という奥底」に忍び込み、その後の自分の歩き方を密かに決定  
づけたような気がしないでもありません。

*(English expression ver.)*

**“Unconscious one pushed for ahead.”**

With sharp eyes like a fighter, but out of image, loving` a child, cherishing, even if others`  
child.  
Watching at child who is visiting to restaurant, her face gets turned to soft, stopping the sharp.  
Above has been repeated so many times. Sometime soft, sometime sharp, such never.  
Very well worker without concern to her own outlook from others` eye. Stuck the floor of  
restaurant, politely sweep up around by hand with towel.  
And mother like a woman boss because so well cherish the members from her the same  
country.  
But on opposite little bit jealousy holder.  
This change easily comes out on her face obviously.  
Also, kiddy face holder.  
More cute and humorous than my pre-holding images.  
But brain running is so well than above mine, also.  
Looks like no diploma of hi educational but well concerns and well noticing around matters.  
Nowadays nowhere type in our country.  
And what her outlook is, that`s no set up like that, but as my image, she is a mysterious,  
married, gorgeous woman spy wearing black Chinese dress whose leg side long slit holding.  
At our first, we started from asking each country language to giving lecture to each other,  
Or helping, getting helped,  
Or covering, getting covered,  
Or bringing difficult getting things, on opposite getting offered homemade meals,  
To each other to get reached there was.  
Otherwise, while visiting there, always on my Chinese liquor keeping bottle, for at one glance  
easily finding out, put a rubber ring around neck of the bottle and on pasted label written “ old  
man”(=Japanese language “老人(Rou-jinn)”, Chinese the same, but pronunciation “Rao-

lenn”)

At the first no complaining of mine, but my emotional getting higher and higher inside, turning to concern happened.

Then at someday I asked,

“Yes. I`m old man, I know it. No need noticing such more on me. Why you write it up on my bottle as if you want to confirm, fixing?”

But only while something what like a quiz smile wearing, no giving straight just the answer, such a behavior no having anymore.

On her face written “it`s a se!!-c!!-ret!!” looking like.

On her usual kiddy face, so written.

But at a sometime, while she got absent from restaurant hall, me even though no had do anything, unconsciously checking my bottle placed on the rack. From it, I found the difference out. The difference is written word not 老人(=old man) but 老斗(=meaning ? in Chinese language).

“The outlook of the Kanji word is very similar but not the same. Maybe different meaning, it has,” I guessed it.

Then I checked it on internet site.

老斗=Rao-doh=always fighting, it means in Chinese language/in English language.

Then a, while asking about it to returned her,

“You, always, fighting.”

She answered like above with shy smiling.

Such her behavior looked so lovely and cute, then,

“In Chinese language, lovely and cute, what you call?”

“Kuh-ai(可愛)”

“Ax, so that you Kuh-ai, Kuh-ai, very Kuh-ai!! (你、可愛、可愛、very 可愛!!) ”

Final, no married with her, the result. It`s 7 years ago happened matter.

But the word “老斗(Rao-doh) which 俊麗(Juan-lee) gave to me at the time as it happened, has stayed inside the core of my mind.

Despite I notice that it`s so big mouth by, however, while thinking at now, at the time firstly looking at, hearing of, one word, the word “老斗” secretly rushing into the natural of mine, the way of later walking of mine decided, I can count it, I can say, I can regard to it, might be, maybe, perhaps.

2023/12/17

17<sup>th</sup> Dec. 23

(Japanese expression ver.)

# 「真夜中の秘密会合」

(English expression ver.)

“Midnight secret team meeting.”

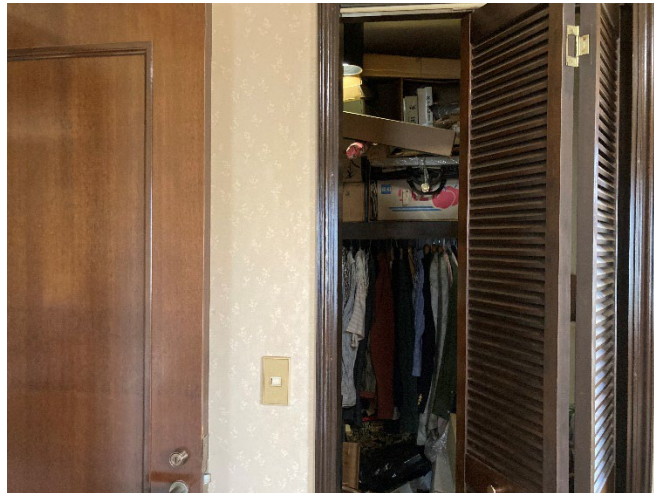
2022/8/25-2

原作

(改訂版 真夜中の秘密会議)

Original

“Arranged ver. Midnight secret conference.”



(Japanese expression ver.)

「真夜中の秘密会合」

「あれっ、なんでこねえいな処にお袋のハンドバッグが落ちとんにいやろう？」

探し物があって以前両親が寝室として使っていた部屋に入って直ぐの処に皮のハンドバッグがあるのに気づきました。

このバッグは2年ほど前、お店の資金繰りに窮して古物商へ査定に出したのですが、昨今は動物愛護の観点からワニ、蛇、ダチョウ等嘗ては高価で取引されていたものでも買い手が激減しているとかで二束三文の値段しか付きませんでした。

それで仕方なく売のを止めてクローゼットの中に戻しておいた心算だったのですが何故かそれがクローゼットの前に落ちておりました。

確かにクローゼットの扉は空気の入れ替えの為に開けっ放しにしておいた記憶はあったのですがバッグ一つを仕舞忘れた覚えはありませんでした。

「妙な事があるものやなあ」

この家は両親が亡くなって以降自分が遺言に従って引き継いだのですが、一人で住むには矢鱈だっただく陰影部分もかなりあるせいか時折「ポルターガイスト（超常現象の譬え）」みたいな事がしばしば起こっておりました。

風も吹いていないのに扉がガタガタ鳴ったり、誰もいない筈の二階をかなり体重のある人間が歩いている様に床がミシミシ軋んだりしていたのです。

それでこのバッグの一件も「例の奴やろう」とあっさりケリをつけ、階下に降りました。

「ダメだったじゃないのよ」

とクローゼットの中でお袋が使っていた古いカーディガンが言いました。

「気づきはしたけどその先、昨晚の打ち合わせで描いた筋書き通りにはいかなかったな」

と今度はオヤジが使っていた古カバンが答えました。

実は昨夜このクローゼットの中で両親が生前に使い今ではその肥やしになっている古物達が秘密の会合を開いていたのです。

議題はズバリ

「私たちを使って!!」

主旨はと申しますと

「人間様は自分が使わなくなると人にあげたりもせず、ただ単に仕舞っておいたり捨てたりする。確かにその人の中では私たちは「もう終わっている」のかもしれないけど私達からすると「まだ全然終わってなくて」これからも引き続きお役に立てるしもっと活躍もしたい。なのにその場が与えられないままこの世から消されるのは如何にも残念でならない。この不完全燃焼から一刻も早く脱して再びのびのびと活躍できる良い方策はないものか？」

でした。

その折、古カバンが提案したのが

「ハンドバッグ、お前が一番目立つからちょっとご主人様の目に留まり易い処に転がり出してみろよ。まずは第一回目として」

で、それがものの見事に外れバッグが文句を言ったのが先程の件だったのです。



「なあに、ダメだったらやり直せばいい。何度でもやり直せばいい。兎に角やれる限りの事をやってみよう。諦めるのはその後だ。なあ、みんな」

相談の結果、次はこの屋の主が好きそうな破れ「長財布」が転がり出る事で話が決まりました。

「貧乏暇なしで、直している時間がないかもしれんが、ひょっとしたら直して使ってくれるかもしれんからな。兎に角、お金に困っている今のご主人様だから」

*(English expression ver.)*

**“Midnight secret team meeting.”**

“An? Why such here my lost mom`s handbag got dropped? Why?”

Although I had something like a lost and found one, so that entering lost dad and mom used room, as soon as at once entering inside, I noticed the handbag laying on the carpet floor.

The bag 2 years ago around, even though lacking enough money for restaurant operation, calling antique buyer, asking to sell up. But because of that nowadays for saving wild animal, in the past time could sell with hi pricing, however, the bags made from animal skin, these sales sharply gets down on current market, the buyer said, then at the time I no sold them up and returned left antiques to former place inside parent had used wardrobe, was intending to, but why some only one this laying, left on the carpet floor.

Certainly, I had a memory which had kept door open for circulating of air changing to fresh one, but no concern to only one bag forgotten to return to former place.

“Strange matter happened sometimes.”

This very wide space house which was handed over from parent as their belonging asset, but so wide that sometimes not common phenomena happened. For example, while brewing no wind, door sounding “Ding Dong” or while no one staying upstairs, like a very heavy weight person like a walking, downstairs ceiling had sound like a cracking.

From it so like above, that “It`s a former one, the same. No problem might be for me”, closed my concerns and without wonders, going downstairs was.

“Not in success, this plan was!!”

Complained aged cardigan which my lost mom had used, said to the planner.

“He noticed the bag, however, not run on the way of at the time of last night our planned story.”

In this time as a reply, the planner, aged, for business trip, bag which was my lost dad had carried one, said to aged cardigan of the lost mom`s.

In actual, last night inside wardrobe, aged several tools which my parent, while being alive, using but now getting turned to meals for wardrobe, opened secret team meeting.

Core of Discussing, just only one, below,

“Use us more!!”

Main insist was,

“Human, while turning to no use by own, but not giving it to others, merely stock or taking it away into trash box.

Certainly, inside him or her, we aged tools already over might be, but on opposite from our side, we perfectly still not over yet, from now later continuously can be useful, wish to be helpful for them human.

Despite of it, to no given working stage for us, hidden under it, to wardrobe, to trash box, feel so sorry own.

How to get left from this unsatisfied, frustrated, to get newly working stages, can` t we find out or so?

Above the main insist and discussing theme was.

At the time lost dad`s aged bag proposed one was,

“Hey, Mrs. handbag madam, you are the most decorative, then firstly you get laid in obvious front of Mr. current owner!! As a first demonstration.”

But as it absolutely was out of hit point, Mrs. bag madam complained to lost dad`s bag, above.

“No problem!! If it`s out, retrial, we have the way!! In so many times, repeatedly, continuously try again and again, the way we have!! Do you understand? Hey, let`s do, everybody, you!! To give up will be after the trials have done, them.”

After such discussion, as a result, in next time, aged, long size wallet which current owner is likely to pick up, rolling outside in front of him, got fixed.

“Money poor guy has no leisure time. Then in some case, ho has time to repair, but in some case, will repair and will use, we have possibility. Because Mr. current owner has been in troubles of money stock few!! Zero bills, coins only holding inside his hand!! Very money poor guy now, he is!!”

2023/12/18

18<sup>th</sup> Dec. 23

(Japanese expression ver.)

# 「不協和音、不協化和音」

(English expression ver.)

“Unmatched noise, Unmatching noise.”

原作

2022/11/9-2

「奇妙な朝」

Original

9<sup>th</sup> -2 Nov. 22

“Strange morning”



(*Japanese expression ver.*)

「不協和音、不協化和音」

墓地公園を抜けて帰宅する折に、石畳を打ち付けるほど盛んに降る雨の中で、豪勢な水量の噴水が立ち上(のぼ)っておりました。

「こんなに激しい雨が降って周りに水量は溢れているのに、なんで洪水の川に放水する様な噴水を止めないんだろう？」

その先を進んで、水抜きされた池の周りにぐるり巡らされた遊歩道を歩いていると、まだ子供で羽毛がぬけかわっていないのでしょうか、体全体が淡い灰色をした鷺（さぎ）が一羽、すくっ、とした姿で立っておりました。

仲間はいないし、白い羽毛の親鳥もいません。

足下の泥中の餌を捕るでもなく、歩くでもなく、ただ立っている。

「何が目的で身動き一つせず、この激しい雨の中で独り、只々ひたすら立っているの？」

その先をさらに進んで、墓地公園を抜け、畑に出ると今度は、いつもはそんなことをして居ない多くの鳩たちが畑の中にあるのでしょうか、餌になる何かを盛んにつついています。

「よりによって前方が霞む位のこの激しい雨のこんな日に、なんで？」

何かよくわからないことだらけの奇妙な朝でした。

今朝は「物」と、人間以外の「生き物達」でしたが、

「（人間の）自分も端（はた）から見ると、こんな風に奇妙に映って居るのかもしれない」ふとそんな疑念がわきました。

やっている本人は「大真面目」期待は「高評価」。しかし周りから見ると「不可解」で「低評価」。

いや「低評価」どころか、得体が知れずキモクテ「来るな、あっち、行け」。

「え、ナニ？ナンデ、ナンデ？どうしてそうなるの？どういう事？」

「自分の想いと人の評価というものは、いつもこんなにも違うものかもしれないぞ」

そう思うと、

ボタンの掛け違いが怖いような、独り合点による勘違いが恥ずかしいような、そのはき違いを犯さずにいられるのは、針の穴を射通す程難しい業である事が途方もないような。

お互いに異なる姿の相手を思い浮かべながら、まさかお互い、全くの別人を思い浮かべているとは思ってもよらず、必死にお互いを探しているような様な位相違いの隔たり。

出会う筈のない相手、解のない答えを探す「シューシュポスの神話」の様な際限のない徒労。

この先、万が一幸い、位相が合ったとしても、必ずしもその同じ位相の上でお互いの道が交わるとも限らない。

雨が霧状に飛び散る今朝の豪雨をさらに一段と濃くしたような視界不良。

上述の様な行き違いが常時起り得る、その結末の光景を眼前に想像すると、

深夜、陸地と並行して泳いでいるつもりでいた時、気が付くと、いつの間にか、今迄あった陸の街灯りが消え、どちらが帰還から遠ざかる沖合で、どちらが、帰還できる陸地なのか、見えなくなった。

一つ間違うと取り返しのつかない事になりかねない恐怖と緊張。

一瞬にして状況が一変する。

それが、いつ何時起るか分らない事への、言い知れぬ不安と、対処できなかった場合に突然訪れる「ジ、エンド」

その胸騒ぎから来る不協和音、それが自分からなのか、他人からなのか、将又それ以外の何ものか、からなのかは定かではありませんが、それを産む処の不協「化」和音。

それ等が次第に音量を上げていく…

*(English expression ver.)*

**“Unmatched noise, Unmatching noise.”**

While going through nature park for home after own restaurant setting over, under rain sounding like music dram beating, a big fountain was running up toward rainy gray colored sky, gorgeously, oppositely.

“So much water amount here and there around under the rainy sky, nevertheless, however, why no stop this fountain running up like a reverse waterfall, why?”

Trough beside the fountain, going forward, reached to a pond which was inside less water because of for construction.

Inside less water pond, on the mud contained water, a heron covered by gray color feather alone was sharply, independently standing.

Around no colleagues, no parental egret covered by white feather, no one around there.

Nor likely to catch something meals in the mud nor to walk but merely standing, only.

“For what are you merely standing with stop motion such under rain like a waterfall?”

Addon going forward further trough nature park, I was coming to field out.

At there, addon, anytime no such, however, so many gray colored pigeons were picking something up rush and rush on the field under such a rain like a waterfall.

“Why are you selecting such a hard rainy day for getting meals on the field? An? Why?”

Surrounded by such unknown, less understandable events, the strange morning was.

In this morning case, things and except human, creatures. But,

“Human me might be seen like above, strange, unknown, suspicious one, might be or not?”

Suddenly I got held such doubt.

On one side own is so seriously rush, rush. Expected reputation is “hi”.

But from arounds, less understandable, giving reputation is “low”.

No!! Not “low” but because of their holding sense “odd”, then in actual “Never come, get away!!” rejecting, refusing.

“An? What? Why, why? Why such? What happen?”

“Own subjective and their subjective, so far difference, might be.”

Such above I guess,

Likely to reach to fear, likely to get ashamed I felt. Then to avoid above mis, it's miracle difficulty, I counted such a, so.

In this morning powerful rain like a waterfall shower, from it happen the fog, by it, to put unseen, bad viewing condition.

From above, double imagining from above to in real world happening mismatch,

In the case of midnight sea inside while swimming, parallelly the land, unknown, unlight on the land town's light, get lost which direction sea far, which way land closer, returning ok, returning never, suddenly to fall into such situation, if one mistaking, never can regain returning, from the situation to get invited, fear and tension.

At once situation get full changed.

For it, unknown anxiety, which never can catch the time when the accident will happen,

And suddenly to come "the end", which get invited from less, weapon against it, condition making.

From above, the mismatched noise, mismatching noise which I can't judge or from own or from others or from something unknown one, never can count it, such them.

And both noise are, little by little, getting volume, up and up...

(著者プロフィール) Writer`s profile.

うときゅう いっき(writer`s name utokyu ikki or Khazu san)

本名 宇都宮一貴 (うつのみや かずたか)

1953 年東京生まれ( was born in 1953 in Japan.)

早稲田大学第 1 文学部露文学科を 2 回留年の後、卒業。

国内電機メーカー家電製品商品企画部に 20 年間勤務。同子会社経理部等に 16 年間勤務。

40 歳から五 52 歳まで 12 年間うつ病を罹患。

左遷、リストラ、降格、離婚、家族崩壊等を経験。

定年後、株式会社 うと Q を設立 (After retirement from Toshiba, established, “utokyu corporation” in 2014)

現在主業はネパールカレー屋。(Now main business Nepali curry restaurant, “Namaste everybody” owner)

趣味は観察すること、考えること、書くこと、盗撮はしないスマホ・カメラの四つの k。

著者名は苗字、宇都宮一貴の音読みで、中学校時代の仇名。

宇宙の「う」

東京都の「と」

宮殿の「きゅう」

数字の「いち」を詰まり音便で「いっ」

貴族の「き」

で、うときゅういっき となります。

漢字表記にしますと、かなり御大層な人物に見え、実態に全くそぐっておりませんので、誤解を招かぬよう音読みひらがなで表記しております。

ホームページ：<http://utokyu.co.jp>

(出版情報)

著 者 うときゅういっき

発行人 宇都宮一貴

発行所：株式会社 うと Q ナマステ別館堂出版部

〒215-0018

神奈川県川崎市麻生区王禅寺東 5 丁目 3 4 番 7 号

電話 (phone)：044 - 989 - 1698

発 売 株式会社 うと Q ナマステ別館堂出版部

編 輯 しばらくの期間「ナマステ別館堂出版部」

カバーデザイン & DTP 製作 当面の間「ナマステ別館堂出版部」及び「ナレッジフォレスト 大竹鉄哉」

©Kazutaka Utsunomiya uploaded in Japan from 2020

発行日：2023 年 12 月 19 日初版発行（19<sup>th</sup> Dec. 23 released.）

本書の一部または全部について、著作権上、著作権者の承認を得ずに、無断で複写、複製することは禁じられています。All cory rights reserved.

（その他著書）

●多数

●尚、掲載写真は全て google 画像サイトの著作権フリーのものをダウンロードして使用しております。当社には著作権、版權は全くない事を明記させて戴きます。